

おかしな歳時記

宮崎神社「お当大根」とうだいこん

— 今に残る当(頭)屋祭祀その① —

明見町の宮崎神社では、当(頭)屋祭祀の「お当神事」が現在も続けられています。

「お当神事」とは旧暦十一月一日(平成二十一年は十一月二日に実施)に行う神迎え神事のことです。その時に神供する大根の味噌煮を「お当大根」といいます。この「お当大根」を準備する任に当たることを「お当(頭)」と呼ぶそうです。大当(オオトウ)・小当(コトウ)と呼ばれ、籤引きによって一年交替の役の者が「当屋」となり、行事全てに責任を持ち務めています。

「お当大根」の準備は、当年の社守二名とその家族、及び前年の社守二名とその家族が手伝いとして、およそ八名で三日間かけて行われます。大根の皮をむき、首と尾の部分は切り落とし、胴の部分に竹製の尺を当て五寸(一五七)の大きさに輪切りして揃え、例年二〇〇〜二五〇切を用意します。この作業は、主に女性が行います。「お当神事」前日からいよいよ大根の調理が始まります。六時間ほどかけて水者を行い、午後三時頃より、味噌仕立ての調味液を入れて、一晚煮込み続けます。その晩、社守らは集会所で

泊まり、火の番と共に、神饌の一つ「おシロジロ」を準備します。

神迎え当日は、午前六時から神事が開始されるため、暗いうちから準備が始まります。竹杖をもった総代長が



味噌での煮込み風景

宮司、白装束に着替えた社守らを先導し、鳥居をくぐり、拜殿に着くと、神事が始まります。大根は神事終了時間を計らい、薪をくべて温め直します。神事も終了すると、直会(神酒・神饌を下げ酒食する)が始まります。「一本くれ!」「太いやつをくれ!」など次々と大根のおかわりがあります。直会も一段落した頃、次のお当を決める籤引きが行われます。

形こそ変化をしていますが、いまでも当(頭)屋祭祀が存続されている地域の伝統、風土に驚きと力強さを感じました。いつまでも残りたい地域のパワーの一つです。

図書館交流プラザ岡崎むかし館主任専門員

野本 欽也

「よいかま」病気の話

小児における新型インフルエンザ

— ワクチン接種のすすめ —

2009年4月にメキシコに始まった新型インフルエンザは、8月から日本でも大きな流行をみました。岡崎市でも9月から高校生を中心に流行し、小中学生へと広がっていきましました。2010年の春になり、ようやく落ち着きました。

季節性インフルエンザとの大きな違いは、比較的年齢の高い子どもにも流行したこと、肺炎により呼吸困難になる子ども

が多かったことでした。東海小児神経研究会のまとめたデータでは、新型が季節性に比べて、重症のインフルエンザ脳症を発生しやすいということがあります。肺へへの影響は強いのですが、脳への影響は季節性と同じぐらいのようです。

この冬も新型が流行するかどうかは、専門家の間でも意見が

分かれています。インフルエンザを流行させないために、まずは、ワクチンを接種することが大切です。昨年のインフルエンザワクチンは、新型を別に接種する必要がありました。今年、ワクチンには新型も入っていますので、いつもどおりの接種をすれば大丈夫です。かかりつけの先生と相談の上、接種してください。

インフルエンザは、ワクチンだけで完全に予防することはできませんから、手洗い・うがいなどをしっかり行い、予防に努めてください。

岡崎市民病院 小児科
神経感染症部長 辻 健史

市民病院を受診する際は「かかりつけ医」の紹介状をお持ちください。